

第20回 旧ソ連邦11カ国の新独立国家室「シルクロード外交」の現場へ

塩尻宏

(中東調査会参与、元駐リビア日本国特命全権大使)

《欧亜局新独立国家室長の最初の試練》

私は1999年5月10日に欧亜局新独立国家室長に異動しました。前任の室長からは、外務省の組織上の制約から「室」の名称となっているが、実質的には「課」と同じ扱いとな



っていると説明されました。当時の新独立国家室は、中央アジア5か国（ウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン、キルギス、タジキスタン）、コーカサス3か国（アゼルバイジャン、アルメニア、グルジア）、東欧3か国（ウクライナ、ベラルーシ、モルドバ）の11か国を所管していました。直前に在職していた中近東第二課が当時所管していたのは9か国（現在は10か国）でしたが、それよりも多い数の国々との外交関係の窓口業務の責任者を務めることになりました。当時の新独立国家室は、その後行なわれた組織改変によって、東欧3か国を除く8か国を所管する欧州局中央アジア・コーカサス室となっています。

私が所管することとなったこれら11か国は、ロシアが主導していた旧ソ連邦の構成国でしたので、それらの公用語はロシア語でした。ロシア語が出来ない私は、アラビア語ができない課長がアラブ世界を担当する場合の心細い思いが想像できました。同時に、私と

しては、新たな異文化社会を垣間見るまたとない機会を得たと感じて微かな興奮を覚えしました。

日本語とアラビア語と大阪弁しか知らない門外漢の私が、なぜロシア語世界の担当を任せられたのかはよく分かりません。主たる要因は当時の人繰りの都合と思われませんが、中東世界に隣接する中央アジア・コーカサスは文化的にもイスラーム圏で、特にトルコの言語・文化的影響が色濃く浸透しています。そのため、新独立国家室の室長は、創設時から代々トルコ語のノン・キャリア職員が室長を務めていました。第3代目の私はトルコ語の専門ではありませんが、人事当局者としては、私が同じ中東の関係者ということで関係者への説明がし易かったのかもしれませんが。

外務省の地域課は異文化世界を直接に相手にする組織ですが、責任者である課長ポストにはその地域についての知見を持たないキャリア職員が就任することは珍しくありません。現地事情に通じていなくても部下の知見を踏まえて総合的な判断をするのが管理職の仕事であり、必ずしも専門的知見は必要でないと考えているようです。たとえば、それまでアラブ世界と全く無縁であったロシア語専門のキャリア職員が、代々の駐サウジアラビア大使に就いたり、また、優秀なノン・キャリア職員であるとの理由で、朝鮮語の専門家が駐リビア大使に配置されたりすることがありました。それらの人事の妥当性を説明するのは容易ではなく、単に人繰りの都合としか理解できません。

《ソ連崩壊後の独立国 NIS》

新独立国家 (New Independent States、以下、NIS) とは、1991 年末のソ連邦崩壊に伴って独立した国々 (ロシアを除く 14 カ国) の一般名称です。バルト 3 国 (エストニア、ラトビア、リトアニア) は当初から参加しませんでした。ロシア及び旧ソ連邦から独立した 10 カ国 (その後 12 カ国) は独立国家共同体 (CIS: Commonwealth of Independent States) を結成しましたので、その加盟国は CIS 諸国とも呼ばれます。新独立国家室は、ロシアを除く CIS 諸国を担当していたことになります。

NIS 室の所管地域を見回してみると、国名からしても何となく馴染みがあり、日本にとっても重要な国々があることが分かってきました。ウクライナは旧ソ連時代から重要な工業地帯・穀倉地帯として知られていました。1986 年に同国北部のチェルノブイリで起きた原子力発電所事故は、欧州全体を震撼させましたが、その直接的な被害は北隣のベラルーシ (白ロシア) にも及んでいます。コーカサス (カフカス) 地域には早くから一大産油国として知られるアゼルバイジャン、古い歴史を持ち旧約聖書にある「ノア方舟」が漂着したと伝えられるアララト山があるアルメニアがあり、同じく古い歴史を有するグルジアは旧ソ連の最高指導者であったスターリンの出身地であると共に良質なワインの産地としても有名です。近世以降イスラーム圏となっていた中央アジアのウズベキスタン、カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、キルギスは、トルコやペルシャ (イラン) など周辺の文化的影響が交錯し合う地域です。その意味では、地政学的にも少なからず中東との関係がある地域であると言えます。

外務省の課には課長の下に課内の業務を統括する首席事務官が居ますが、NIS 室にも首席事務官が居ました。キャリア職員は入省後 10 年ほどして首席事務官を経験して数年後

に課長に昇進するのが通例ですが、私は首席事務官を経験しないまま実質的な課長職に就きました。幸いにして、私のNIS室長在任時の首席事務官はロシア語専門職のベテランでした。今になって考えても、門外漢の私が室長としての役目を何とか果たすことができたのは、有能で温厚かつ忍耐強い彼のサポートのお陰であったと感謝しています。現在、その彼は在ハバロフスク総領事（2013.5現在）を務めています。

《「ユーラシア外交」と「シルクロード外交」》

1991年末のソ連邦の消滅によって米ソ対立を前提としていた世界秩序が根本的に変化しました。1900年代から2000年代にかけては、ロシア、東欧、中央アジア諸国は社会主義経済から市場経済へ移行し始め、中国では社会主義市場経済を唱えて改革・開放路線を推進するなど、新たな世界秩序を模索して流動的な国際情勢が続いていました。

そのような国際情勢を背景に、当時の橋本龍太郎総理は、1997年7月24日に経済同友会懇談会で「今後の我が国の外交政策のあり方—対露外交を中心に—」と題する演説を行ない、その中で、ロシア、中国、シルクロード地域に対する「ユーラシア外交」を積極的に展開する必要性を強調しました。当時、橋本総理が唱えたこの「ユーラシア外交」は、ポスト冷戦時代の日本の外交理念を示すものとして世論の関心を引きました。

橋本総理演説の中で言及されたシルクロード地域とは、まさに新独立国家室が所管する中央アジアからコーカサス、東欧にかけての国々のことでした。それまでは一般の日本人にとっては余り馴染みがなかったこれらの諸国は、その後展開する日本外交の新たな対象地域として脚光を浴びていました。

私がNIS室長として勤務した頃は、橋本総理の「ユーラシア外交」演説の直後でもあり、シルクロード地域諸国と極めて活発な外交が展開されている時期でした。外務省資料によれば、私が新独立国家室長として在任していた22か月間（1999.5.10～2001.3.5）だけでも、ナザルバエフ・カザフスタン大統領（1999.12）を始めとして閣僚級以上の要人の訪日が20件以上、羽田孜元総理や政務次官を含む国会議員の現地訪問が8件、コーカサス友好親善ミッション（1999.10）など日本からの使節団訪問が2件、セミパラチンスク支援東京国際会議（1999.9）や欧州安全保障機構（OSCE）パートナー国との共催会議（2000.12）など東京で開催された国際会議への対応もありました。

上記の日本からの要人訪問の幾つかには同行したほか、合間を縫って他の所管国にも出張しました。在任中に全ての所管国を訪問したいと思っていましたが、結局、トルクメニスタンだけは機会がないままとなり、訪問したのは10か国でした。また、その間に、キルギスで日本人JICA専門家4名と現地人通訳1名が武装集団に誘拐される事件（「キルギス日本人質事件」：1999.8.23～10.25）も起きるなど、思い返せば、まさに席の温まる暇もないような日々でした。

《新任挨拶まわり》

10人そこそこの規模のNIS室とは言え、室長に就任するとまずは省内関係者への挨拶まわりをするように言われました。発令の当日と翌日の2日間で外務省内の大臣官房（人事課や会計課など）及びその他部局の局長から課長・室長への挨拶を済ませました。3日目

からは、関係省庁や関係団体などと共に各国との友好議員連盟の幹部を中心に国会議員への挨拶まわりが始まりました。具体的な挨拶先は、前例や局内関係者の意見を参考にしながら決めました。上述のとおり NIS 室の所管国が 11 か国もありましたので、関係議員の数も多く、それらの議員をひとわり訪問するのに 2 週間ほどかかりました。

政府レベルか民間レベルかを問わず諸外国との関係には、多くの場合に利害が絡みます。そのため、各国との友好議員連盟や友好協会などは与党議員が主導するのが通例です。当時、私が新任挨拶のために訪問した議員の殆どは与党自民党の議員でした。私の所管国のいずれかの国の友好議員連盟の会長など幹部を務める議員たちは、大抵の場合は相手国を訪問した際の思い出話などを披歴しつつ友好的な対応でしたが、相手国との緊密な関係を誇示する議員にも出会いました。

先年の政権交代時に与党となった民主党の議員たちも、先例に倣って幾つかの国について彼らが主導する新たな議員連盟を立ち上げようと動き始めました。しかし、3 年後には自民党が与党に復権し、現在は民主党議員の動きは立ち消えとなっています。

《ある議員との軋轢》

挨拶まわりで訪問した中には、ソ連時代からロシアとの関係が深いことを自負し、それを活動の拠りどころとしていた議員もいました。与党自民党の中堅であったその議員は、名前を聞いたこともないアラビア語専門の職員が旧ソ連圏の諸国を担当する責任者に就任したことに不安と懸念を抱いたようでした。彼のところに挨拶に赴いた際に、その議員から唐突に「そもそも NIS 室は私が関係省庁に根回しして設置した組織である。あんたがその室長の就任することは誰からも聞いていない。私に相談もなく決めた室長は認めない」と言われました。私は、予想もしていなかった先方の対応に驚くと同時に当惑しました。

外務省に戻って上司の欧亜局長に報告すると、彼も驚いて、その議員の意図を計り兼ねて困惑していたのを覚えています。この背景には特別な事情があるのではないかと考えた私は、前任の室長に同議員と NIS 室との関係について尋ねてみました。前任者は、彼の在任中には、その議員は NIS 室の業務に格別な関心は示していなかったもので、他の議員と同様に対応していたとのことでした。結局、その議員の意図は不明のまま、突然に異様な緊張状態が発生しました。

この事態を受けて欧亜局長は、三日に上げず私を同伴して自民党本部や国会の委員会室などにその議員を訪ねて「事前に先生のご了承を頂かなかったことはお詫びする。彼（塩尻）は優秀な人物なので、今回の件は何とか承知願いたい」という詫び言を平身低頭して繰り返し、時には床に頭を擦り付けて懇願しました。しかし、同議員は「塩尻が何者かは知らないが、本件人事は絶対に認めない。今後は自民党内の会議や各省との協議において外務省に対する支援や協力はしないこととする」と繰り返して、その怒りが収まらない状況が続きました。このような訪問に毎回同行していた私は、与党議員と省庁幹部との関係の実態を見せつけられた思いがして嫌悪感を覚えました。

当時の外務省としては、その与党議員の協力が得られなくなれば、予算の獲得や案件の取り進めに支障をきたす恐れはあるが、一方で与党議員が課長・室長人事にまで介入する

のを認めることは避けたいと考えていたようで、立場を必ずしも明確にしないまま穏便な解決を待つという姿勢をとっていました。それでも、私はその議員の関心事項について淡々と報告に出向いていましたが、毎回不機嫌で冷淡な対応を受けました。理不尽な言いがかりとも思われるその議員の言動にうんざりすると共に、外務省の煮え切らない対応にも失望感を抱いた私は、今回の人事を辞退することを決意し、同時に私なりの方法でその顛末を世間に公表しようと考え始めました。

ところが、1 カ月余り経ったある日、案件の報告で自民党本部のその議員の執務室に向いた際、突然に「あなたは優秀な専門職アラビストだということを聞いた。同じ外務省で活躍している私の腹心である A 君を知っているか？」と尋ねられました。私が質問の意図を計り兼ねながら「A 氏は、私が親しくしている優秀な同僚です」と答えると、「よし分かった。これからは、あなたのことを応援する。何かあれば、遠慮なく相談して欲しい」との発言があました。こうして、悪夢のような日々は突然に終わりました。しかし、この突然の展開の背景事情は、私には未だに明らかではありません。

《欧亜局内の後遺症》

当時、各省庁の幹部は、その議員が関心を持つと思われる案件は全て事前に報告して意向を確認するように気配りしていました。自民党本部にあった当時の同議員執務室の隣にある控室には、面談を求めて待機する各省庁の局長レベル以上の幹部の何名かの顔が見られ、多い時には 10 名以上のこともありました。それでも、彼の意図を読み誤って行き違いが起き、緊張関係になることは珍しくなかったようで、私の NIS 室長人事をめぐる軋轢もその一つであったように思います。

その議員と欧亜局との異常な緊張関係がある日突然に解消された結果、同議員の私に対する対応も手のひらを返したように好意的となり、私が同議員に報告したり相談したりする NIS 室の案件については、全て円滑に取り進められるようになりました。同議員の日程はもともと極めて過密で、アポイントメントを取付けるのは容易ではない状況でしたので、急な要件の時には、事前のアポイントメントなしで訪問し、場合によっては携帯電話で直接連絡するような関係になりました。

ところが、同議員と私とのそのような関係が欧亜局内で波紋を呼んでいたことを、私自身は気付きませんでした。ある時に、案件の処理方針について局内の上司に意見を求めたところ、「あの先生と特別の関係にあるあなたが、私の意見を聞く必要があるのですか？」と皮肉を言われて驚いたことを覚えています。そう言われてみれば、自民党本部を訪ねた時にも、待つことなく同議員の執務室に出入する私に対して、控室で待機中の各省幹部と思われる人たちが冷たい視線を向けていたことを思い出しました。

欧亜局内の上司や同僚の私への対応も、何となく冷ややかで、かすかな畏怖心さえ示すような雰囲気となりました。しかし、当時の NIS 室で私のサポート役であった首席事務官は上述のとおり有能な人物でした。彼の助けに加えて、私と親交があった幾人かのキャリア職員たちの理解や協力のお陰で、私はその後も NIS 室長としての業務を淡々と果たすことができました。(続く)